

## 2023年 夏季福音特別集会 第3回 主キリストの賜う『愛』に生きる

2023年8月27日（京都KKRくに荘）

奥田昌道

京都召団は森でもつ キリストご自身が愛のかたまり このご恩は一生忘れません！  
キリストに対するご恩返し 信仰・希望・愛を現在化する 日本人の魂の伝道は日本人  
が引き受ける 無者を選び給えり 無者キリスト道 光の国へ行く靈魂と闇の方に行く  
靈魂 福音の道は喜びの道 我々が導かれている世界は生命に溢れる世界 祈り

### ●京都召団は森でもつ

ただ今の森兄弟のご証言を聞いていて、私は本当に素晴らしいなと思いました。森君は1980年の京大会館での講演会においでになった。それから勘定しても43年ほどになるわけです。東京にもいらっしやって、東京キリスト召団の方ともしばらく交わりを共にしてください。そういうことで、本当に京都召団の——まあ「番頭さん」と言ったら失礼ですけどけれども——対外的な交渉、会場のくに荘とかいろんな施設との交渉、あるいは他のキリスト召団との連絡といったことを一手に引き受けて、今日まで本当に事務局長としてしっかりやってきてくださっている。

「尾張名古屋は城でもつ、京都召団は森でもつ」

と、こういうふうには思っているんです。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

森君と私との共通性は何か。マラソンなんです。森君が福知山に居られた頃、一緒に42キロのマラソンを走った、そういう間柄でもあります。それから野球も好きだった。そういうようなことでいろいろ共通点があつて、本当に私は嬉しく思っています。それこそ一緒に活動がもう40数年になろうとしているんですね。有り難い、嬉しいことです。

さつきお話になったことは、的確にこれからの京都召団に必要なことがらをつかまえて、そして新しい提案をなさっていらっしやる。京都召団では男性陣として、錦織、村岡、森という三兄弟が中心になって、召団を引っ張ってくださっています。女性陣もなかなか華やかで、いろんな形で集会をサポートし盛り立ててくださっています。

だから、私としては、私が天に召された後にも、あるいは召されなくても、集会で皆さんをリードしていく役割が肉体的に重すぎるとなった時に、森君が今仰ったような形で——キリストが建て給うた召団ですから、私はその御用を仰せつかっているだけにすぎないわけでした——キリストが建て給うたものはキリストが必ず守り導いてくださる。それを



どうぞ、召団のお一人お一人は肝に銘じていただきたいと思います。

「奥田先生がいなくなったら、どこか適当な教会を探して、そっちへ行きますわ」

なんて、これは裏切りですからね(笑)、失礼ながら。船が沈むとき運命を共にする。逃げ出すのではない。沈む船と運命を共にする。そうしたら、

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」

とあって、キリストの助けはそこに臨みますよ。人間の造ったものではない。キリストが建て給うた群れです。ということは、他にないものをキリストは見てください、そしてそれを育んで、これこそ日本に本当に根付いていくような新しい行き方だと、そういうふうに主は見てくださいっているのではないだろうか。

例えば、私を知らんになっても、私は本来、法律家、研究者の道をずっと歩いてきた人間です。そのことは、昨日も申しました。福音宣教のための、伝道のための特別な訓練も何もお受けてないし、そっちの学校に行つたわけでもない。専ら法律家としての研究・教育に従事しながら、役割として福音の証<sup>あかし</sup>をやってきた。そういう人間が今日まで用いられ、そして夏の福音特別集会、その他講演会等々においても本当に皆さんの協力を得て、ここに京都召団の地歩を固めてきました。そういうことを思いますと、本当に皆さんの協力があって初めて主の御用を果していける。だから、私がどうなろうと京都召団は絶対に大丈夫だと、私は確信しております。はい、ありがとうございました。

### ●キリストご自身が愛のかたまり

今日の題は、「愛」ですね。「信仰・希望・愛」という三つの中の、今日は愛のお話ですけど、でも、愛というのは何なのですかね。実はキリストご自身が愛のかたまりなんです。だから、愛の在り方というのは、キリストを見て、キリストが歩まれた歩み、それが愛の具体的な姿なんです。哲学的に、

「愛とは何ぞや?」

なんて言っている事態ではない。キリストが歩まれたその道、これが愛の道である。そういうふうには私は思います。

そして、今回、この集會に間に合うように森さんを中心にして作っていただいたこのパンフレット(小冊子)の冒頭に、正に愛というものをかかっています。これもなにか不思議なご縁だと思います。これは私の講演録ということで、題名は

『永遠の生命』(キリストの「復活の生命」を生きる)

で、副題として、

「復活節に賜る神・キリストからの贈り物」

と題しまして、今年の4月9日に、正にこの場所で講演したことを文字化したものです。何人も外部からも来ていただきました。そういうところでお話をしたものを小冊子という



形でまとめていただいた。一般講演会で私が話す時には、一般の方々も入りやすいように気をつけながら、お話ししております。だから、一般講演会でお話したものが文書としてまとまった時は、ぜひこういうものを、皆さん、用いていただきたいと思えます。いきなり、「キリストはどうだこうだ。あなたもキリストのところへ来なさいよ」なんて言うのではなくて、

「実は、我々は今度、こんなものを作ったんですよ。何かのときにご参考にしてくださいね。まあ、暇つぶしにでも一度、ご覧になつていただいたらありがたいです。できれば感想でもお寄せいただいたら、またこれから自分たちがこういうものを作る時の参考にさせていただきますから」

というふうに勧めて、

「気楽に読んでくださいね」

という形でばらまいていきますと、またその中から、

「良かったよ!」

なんていう返事がきたら、嬉しいですよ。いくらもパンくずをまいて、それを本当にパクリと食べて、

「素晴らしかった!」

という反応がきたら、それは配った人間としてはものすごい喜びがあるんですね。そういう形で、今までいくつかこういうものを作ってきました。そういうものを——寝かしておいても全然ダメなんです——是非ばらまいて、それを受けとった人が十人いたら、その中で一人かもわからないけれども、一人しつかり受けとってくれたら、それで素晴らしいじゃないですか。

そういうことで、語り手は私がやってきましたけれども、それを広めていく役割は集会に参加する皆さんお一人お一人が、それなりに自分の置かれた立場とか人間関係を考えながら、関係ある人々にお配りする。そして、受けとった十人のうち一人でも

「良かったよ!」

と言ってくれたら、大成功なんですよ。

キリストの福音をその当時、聞かれた方々は何百人といたはずですね。その中から選ばれて弟子になった者はごく少数です。けれども、あのペンテコステ(聖霊降臨)を通して、また新しい御業を神はなさったわけです。本当のキリスト教会というのはペンテコステを通して、それから始まった。しかし、中心となったペテロ、ヤコブ、ヨハネはみな元はお魚採りでした。キリストは、

「人を漁る漁師に仕立て上げる」

と仰ったけれども、やっぱり元は漁師という生い立ちの彼らは、自分たちはしつかり信仰を持っていても、それをどんなふうにも人々に伝えていくかについては、やっぱり戸惑いも



いろいろあったでしょう。

そこで福音伝道の活動へキリストはパウロを加えた。パウロは当時の知識社会において、押しも押されぬ立派な学者としての教養や知識を持ちあわせていた。そのパウロを用いた。しかも、キリストはパウロに、ダマスコ途上で霊撃し、じかじかに臨まれたでしょう。彼はキリスト教徒を迫害していたんですから。ステパノが殉教する時、パウロはステパノの石打ちに対して賛成していた。そういう反逆の徒パウロをキリストは捕まえて引っくり返して、まあいうならば一番弟子としてお用いになった。

ペテロ・ヤコブ・ヨハネは信仰は篤<sup>あつ</sup>くても、元の職業がお魚採りということで、世間に対して福音をアピールしていく面で、あるいは論理的・歴史的に展開していくという面ではいろいろやはり足りないところがあつたんでしょう。その点をパウロはしつかり補って、本当のキリスト神学と申しますか、ビクともしないキリスト哲学をうち立ててくれた。私はそんなふう思う。ということは、キリストはそれぞれ必要なものを必要な時に備え給う。

●このご恩は一生涯忘れません！

現代へ話を戻しますと、私はキリストに導かれて、この世の職業とは別の仕事でありながら、福音伝道を50年間続けさせていただきました。それによってまた多くの方々にキリストの福音を伝えることができました。そのことがこういった特別集会においてもたくさんの方々がお集まりくださるということになったけれども、それは全部、キリストがなさっている御業であつて、我々弟子は主の意<sup>いこう</sup>を意とする。そうですよ、

「主さまー」

と、皆さんは呼んでいます。「主さま」と言ったら、自分たちは僕<sup>しもべ</sup>・婢<sup>はしため</sup>にすぎません。僕・婢は自分の独自の意志を持たない。

「主さま、あなたの意志が私の意志となるんです」

と、そう言つて、自分を投げだしていく。ということは、それだけ主さまに対する信頼があつたということですよ。

「この方のためには命を棄てても惜しくない」

という、それだけのものを頂いているんです。それだけのものを頂いていなかったら、そこまでやれないですよ。

だから、クリスチャンといいますが、キリストの僕として婢として務めを全うしたいという人は本当に、

「このご恩は一生涯忘れません。このあなたのくださったご恩に対して報いるのは自分の全存在を捧げても足りないくらいです」

という、それだけのやっぱりご恩を感じていないと無理ですわ。人間とはそういうものでしょ。よく、



「このご恩は一生忘れません!」  
と言われます。たとえば、破産して一家破滅で、一家心中しようかというような時に、もしも誰か奇特な人がいて、肩代わりして助けてくれたら、

「あなたは我々家族の本来に救い主だ。このご恩は一生忘れません」

と。そして、その相手の人いわく、

「いや、私にお返しはいらん。あなたのその思いを世間の人々みんなに伝えてほしい。世間の人々を、苦しんでいる人を救い上げてほしい」

と。もしそういう方が現れてきてくださったら、それは素晴らしいことですね。

ま、いうならば、私たちは主イエス・キリストによって本当に助けられた。時には死から救い出された。行き詰まりから救い出された。

「破滅から助けていただいた。そのご恩は一生忘れません」

と。では、どうやって、お返しするんですか。

「いや、私にお返しする必要はないよ」

と、キリストは言われた。

「あなたの受けた恵みを世間の人々に伝えなさい。私が応援するからね」

「はい、ありがとうございます」

と。そういうふうにして、天地一如になって、この神の愛、福音を伝えていく。これが我々の使命ではないかと思う。

福音書の中にも、「レギオン」という悪霊軍団にとり憑かれて、昼は墓場に行つて叫び回つて、鎖で繋いでも、鎖を引きちぎつて暴れる<sup>あば</sup>という人のお話がありますね(マルコ5:1〜20)。

そういう人にイエス・キリストが近づいて行かれると、パッとイエスの中にある神の霊に気付いて、それに対して抵抗しようとした。キリストが悪霊を追い出される時に、悪霊どもは、やつぱり霊ですから、形、体をほしがります。それで、

「どこか行き場所をください」

という。そこに豚の群れがいたので、

「では、豚の中に入れ!」

ということをイエスは仰った。したら二千頭の豚の中に悪霊が入つて、豚は崖からなだれ落ちて、湖に沈んで死んでしまった。村人たちがその話を聞いて来てみると、今まであれだけ暴れまくっていた人がおとなしくキョトンとして坐っていて、自分たちが養っていた豚が居らんわけです。

「どうしたの!?!」

と問うと、

「豚は全部、海に溺れて死にました」

と。そこで、問題となるのはその村人の反応ですよ。こういうことを行うイエスという危



険人物に居てもらったたら、これから何が起こるかかわからん。

「どうぞ、立ち去ってくれ！」

と。そういう反応なんですよ。悪霊にとり憑かれた人があれだけ荒れ狂って、どうにも手がつけれなかった。そういう人が本当に救われて正気になって穏やかな様子で感謝している。それを放っておいて、豚二千頭を失わせた人にここに居てもらったのでは、今後どんな災いが起こるかかわからん、「どうぞ立ち去ってくれ」と言つて、イエスを追っ払った。ああいう対応に対して、本当に私は煮えくり返るくらいの思いで居るんです。

へたすると現代の日本社会もそういうところがあるかもしれない。御利益ごりやくを求める社会ですから。自分たちに経済的な面でプラスになれば歓迎するけれども、そうでなかったら、

「とつと立ち去っていただきたい！」

というような反応かもしれない。

まあそんなことでね、今どういうわけかそういう人の話になりましたけれども。救われたその人にしたたら、

「このご恩は一生忘れません！」

という気持ちだったと思う。そして、

「どうぞ、お供をさせてくれ。あなたのいらっしやる所にはどこへでも付いて行きます」

と言ったら、イエスはそれを断られた。

「あなたはこの村に留まって、村人たちにまた親族に、主がどんな素晴らしい

ことをしてくださったか、それを伝えなさい」

と仰った。それで、彼はそのようにした。だから、

「この話はデカポリスにまで広まっていった」

ということが、あのお話の一番末尾に書かれています。ああいうお話というのは、非常に現代においても参考になると思う。

私たちはイエス・キリストによって、それぞれが「このご恩は一生忘れません」という恵みをいただいた。この恵みをいただいているから、「ご恩返しをしたい」という思いが湧いてくるんです。キリストは、

「多く赦された者は多く愛する」

と仰った。

「少ししか赦されていない者は少ししか愛さない」

ということを仰っている。ですから、私たちはどれだけキリストのために、福音のために、身を粉にして働きたいと思うかは、どれだけキリストから恵みを頂いたかという、その自覚によって比例していくのではなからうかと思えます。

私は本当にキリストによって死から生命へと移していただいた。このご恩は一生忘れま



せん。というのは、私は本当に昔から思い煩いが多い人間でね、いつも申しますように、過去を振りかえれば、後悔することばかりがある。将来を思えば、心配事が次から次へと湧いてくる。現在といえ、全然生きていない。

「今日一日でも、本当に充実して生きたという、そういう生き甲斐・実感を感じる一日を生きられたら、もうそれだけで十分です」

と、そういう思いだった。そんな「永遠の生命」なんてことは別に——そんなことはほとんどないことで——自分では特に思わなかった。ところが、キリストは、私を過去のいろんな思い煩いから、あるいは過ちから、罪から、全部解放して、

「それは私が引き受けた。将来のことは私が責任を持つから心配するな。あなたは私に従って来なさい。我は道なり真理なり生命なり」

と。この「道」というのはそれぞれ各人が自分の足で踏みしめて歩く「路」ですよね。そうやって私を弟子にしてくださいました。私からしたら、

「このご恩は一生忘れません」

という、そういう思いです。身分が京都大学の教授であろうが、最高裁判所の判事であろうが、そんなこの世の身分がどうであるかというようなことは一切関係ない。キリストから頂いたこの恵み、この有り難いご恩、これを何とかこの生涯を通してお返ししたい。そして、私と同じように闇から光へと転換を遂げる人が一人でも多く出てくると、これは嬉しいことだと。それだけの思いだったんです。

### ●キリストに対するご恩返し

私は——昨日も申しました——法律家であり、またその研究者でもあって、キリスト教を専門にしたことは一度もないわけです。キリスト教に関してはせいぜい小池先生の著作とか、ちよつとした文献を通して勉強している程度で、決してそちの道の専門家ではない。けれども、キリスト教の専門家だけに伝道を任せておいていいと思っっているわけではない。私みたいな、現世の職業で正に苦勞している人間がキリストに救われて、その喜びを命懸けで伝えたいと思わせるものがキリストにはある。そのことを世間にアピール(訴えかける)していく。決してキリストの救いというものは、特別な人だけのものではない。万人が実は必要としているのだと。このことについては小池先生がよく、

「万人は宗教人である」

という言葉で仰っています。そういう意味では、皆さんお一人お一人に責任があるわけです。また、別の言い方をすると、神さまのご期待というのが大きいんです。

こういう私のような告白をする人間は、一般の人間社会にはいないはずですよ。というのは、私のようにこの世の職業を一応貫いて、一応世間で認められるような仕事をしてきて、その人間が福音第一で、



「自分にとって最も大事なものはキリストの福音である、キリストの生命である。これを日本の方々がしつかり受けとってほしい」

と告白することは極めてまれだからです。ヨーロッパやアメリカから流れてきた宣教によるキリスト教ではなくて、小池先生が「キリスト道」と言われたキリストの道です。

「日本人は本来、道の民である。術ではない、剣術ではない。剣道だ。柔術ではない。柔道だ。そういう道の民だ。キリストこそは『我は道なり、真理なり、生命なり』と仰った。道であり真理である生命は、それを傍観しているだけではいけない、眺めているだけではいけない。自分でその道を歩いていく。自分の足で踏みしめていく。これではなくてはならない」

ということを言ってくれました。そして、それは決して私奥田一人の問題ではない。この福音を聞いていらつしやる皆さんお一人お一人がキリストのお使いなんです。パウロは、

「皆さんはキリストの手紙である」

ということをコリント書簡の中で言っています。そのように皆さんはキリストのお使いとして、証人として世に送られている。キリストに救われて、キリストのものとされた以上は、我々の人生はもう自分自身の人生ではない。キリストがこれからは責任をもつて導いてくださる。キリストの証人として第二の人生、第二の生涯を、自覚をもって歩んでいく。

「自分の中には何もありません。主さま、あなたがすべてです」

と。これが小池先生の言われた、

「ゼロ・イコール・無限大」(0=∞)

ということです。パウロは、

「われ主と共に十字架せられたり」

と言った。十字架にかけられて、生きている人間はおりませんからね、

「もはや、旧き我、肉なる我、生くるにあらず。ご復活の生命を賜った、新しく生み出された我、御霊のキリストと共にあり」

ということ、そこで死生の転換を遂げて、そして、キリストの僕として福音を生涯をかけて証していく。それが我々一人ひとりのキリストに対するご恩返しではないだろうか。それから、私は信仰に導かれて、欧米の方々の伝道なんかにも触れましたけれども、やはり、日本社会にこの福音を伝えていくのは日本人の手によりたいと思いました。宗教的伝統――日本には昔から神道とかいろんな宗教的伝統が積み重ねられている――があつたところへ最後にイエス・キリストの福音が来たわけです。そういう日本の過去の宗教的、文化的、霊的な土壌を無視して、どこかから流れてきたものをそのまま植え付けて栄えさせるのではなくて、本来そういう土壌の中から必然的に新しく生まれてきたものが、このキリストの福音、日本に根付いたキリストの福音です。それを伝えるのは日本人しかないわけですね、私から言わせたら。



それは誰か。皆さんお一人お一人です。今の日本のキリスト教界でここまでの情熱をもって叫んでいる先生方がいるだろうか。私はよその教会のことは知りませんが、私たちが小池先生が創始者として始めてくださったキリスト道、無者キリストの道を受け継いで、そしてお一人お一人が証言していく、そういう責任があると思います。決してエリートが一人、表に立ってワーワー、伝道するだけでよいというものではない。キリストは、**「この輩ともがらもだ黙さば、石叫ぶべし」**と仰った。それから、

「二、三人わが名によりて集うところに我もあるなり」

「小さき群れよ、**懼おそれるな。御国を賜うことは汝らの父の御意みこころなり**」

と。本当にキリストは、いと小さき者をも顧みてくださるんです。世間はでつかいものに憧れます。けれども、キリストは本当に、幼児、乳飲み子、いわゆる人間的には智慧も力もない、そういう者をキリストは重んじてくださる。これはコリント書簡の初めにも、

「**無きに等しき者を選びたまえり**」

と。コリント第一の手紙の冒頭にあるとおりです。

「**18それ十字架の言ことばは亡おぼぶる者には愚おろかなれど、救わるる我らには神の能力ちからなり**」

(コリント前1・18)

という言葉で始まっていますね。ああいったパウロ書簡を通して、キリストが呻いておられる呻き。これを皆さんお一人お一人が自分の問題として受けとって、

「それでは、私はどういうふうにすれば、主さま、あなたのご期待に添うことができるでしょうか？」

と、真剣に主イエス・キリストさまと対話してほしいんです。

「自分のような者は……」

なんて、絶対に言ったらいかん。その「自分のような者は」というのは、もう十字架で片付けられて、死んでいるんです。そうでしょ。

「**われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず**」

と。それはもうキリストのものなんです。小池先生は、

「エン・クリスト」(キリストの中に)

ということを仰った。

「**われキリストのうちに、キリストわがうちに**」

と。だから、自分はゼロ。それが「無者」でしょ。そういう、先生が生涯かけて告白された「無者キリスト」というのは、自分がゼロなんです。しかも、

「ゼロになれない」

といって苦しんだ時に、

「わが十字架によつて既にゼロにされている辰雄よ」



という呼びかけがきて、畳の上に平伏したという告白をなさっている。先生において、「現実の生きている人間のことは問題ではない。現実の生きている人間がどうだこうだと問題にしているレベルではない。キリストは絶対次元をくださっている。絶対というのには相手に関係なく、貫かれるものだ」

と。そういうキリストがくださった絶対次元のことについてうたっているのが実は、今日のコリント前書13章ではないだろうかと思えます。

### ●信仰・希望・愛を現在化する

では、今日の主題であるコリント前書13章へいきましよう。

「あつ、コリント前書13章は何回も読んだからもうこの話は結構ですよ」  
なんて、そういう反応はなさらないでください。本当にそう思います。読むたびに「新たである」という、そういう受けとり方をしてほしい。13章の初めから見ますと、

「**たと**い**我**も**ろ**も**ろ**の**国**人**の**言**お**よ**び**御**使**の**言**を**語**ると**も**、**愛**な**く**ば**鳴**る**鐘**  
**や**響**く**鏡**鉢**の**如**し。」  
や響く鏡鉢にようはちの如し。

もろもの国人の言葉を語ったり、御使の言葉を語るとしたら、もうそれだけでも凄いことですよね。それだけでも本当に私は驚きます。ところが、たとえそんなことがあっても、もしも背後に、あるいはその内側に、愛が——これはキリストの愛です、キリストご自身の愛です——なかったら、鳴る鐘や鏡鉢の如しと。

**2** 仮令われ預言する能力あり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、  
それだけでもまた凄いことですね。預言する力、すべての奥義とすべての知識を獲得する。更に、それだけでなく、

また山を移すほどの大なる信仰ありとも、

もうこれは羨ましいかぎり。けれども、そんなことがあつたとしても、本当の愛——これはキリストから流れてくる本当の愛——これがなかったら、

愛なくば数うるに足らず。**3** たとい**我**わが**財**産を**こ**と**ご**とく**施**し、**又**わが**体**  
を**焼**かる**為**に**付**すとも、**愛**なくば**我**に**益**なし。

焼身自殺という形でいろんな不義に対してプロテスト（抗議）するような方もいらつしやる。そういうことがあつたとしても、全財産を貧しい人に施すという愛の業があつたとしても、外から見える行動がそういうことであっても、それがあつた種の名誉欲のためであるとか、何か別の理由があつてなされていることだとしたならば、それは全く益なし、何の値打ちもないと。それでは愛とは何ぞや。それについては4節から書かれています。

「**4** 愛は寛容にして……」

という所から終わりの所まで——いつかも申しました——これを書き抜いて壁に張り付けて、その「愛」という所にキリストを当てる。



「あつ、ピッタリだ」  
と。次に皆さんを当てる。

「おお、所々ピッタリだ。所々違っている」

と、そうやってみる。じゃ、ご主人は？ 奥さんは？ 子どもさんは？ と順番に当てていって、全部がピッタリとピッタリだったら、これは素晴らしいですよ。でも、なかなかそうはいかない。

「ああ、やっぱり百点満点にはならないなら、お互い助け合って、許しあって、担いあつていかんとならん。私はまだまだだな」

というふうには、自分が謙虚な姿になるためにも、これを壁に張り付けて、「愛」という所を空白にしておいてそこへ、たとえば、森満夫を当てはめて、

「森満夫は寛容にして慈悲あり」

「ああ、その通りだよ」

と。奥さんのお名前を入れて、

「ああ、その通りだよ」

と。そういう形で、もしもご家族の皆さん、あるいは恋人のお名前を入れて、それがピッタリだったら、これはもう万々歳と思いますね。その愛の姿が以下にあります。

4 愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、<sup>5</sup>非礼を行わず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を念わず、<sup>6</sup>不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、<sup>7</sup>凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。

ここに「信・望・愛」が出てきますね。

<sup>8</sup>愛は長久までも絶ゆることなし。

こういうふうにして、愛の素晴らしさをここにうたっています。

それから、従来からあった預言とか、そういったいろんな賜物、これは一時的なものにすぎないと。賜物というのは役割があつて、役割を果たせば、それで用がない。ところが、愛というものは普遍的、永遠のものだということが、以下に述べられています。

然れど預言は廃れ、異言は止み、知識もまた廃らん。<sup>9</sup>それ我らの知るところ全からず、<sup>10</sup>我らの預言も全からず。<sup>10</sup>全き者の来らん時は全からぬもの廃らん。

「全き者」というのはキリストご自身ですね。それが現れてくださる時には、それ以外のものはもう必要なくなってしまう。

11 われ童子の時は語ることも童子のごとく、思うことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。<sup>12</sup>今われらは鏡をもて見るごとく見るところ臙なり。



今の鏡というのは完璧に写りますけれども、昔の鏡は多分、雨の日にボヤけた自分の姿が窓ガラスを見たら写っている、その程度のボヤけた姿ではなからうかと思う。そのように、今はそういった鏡で自分自身を見ているように、見えるところは臃<sup>おぼろ</sup>だと。けれども、キリストがおいでくださった時、キリストと顔と顔を合わせる時、そのときには全くちがうんだよ。キリストと顔を合わせたら、皆さん、どんな思いでしょうね。私は畏れおおく、平伏すしかないと思っている。ところが、キリストの方は、

「平伏さんでいいよ。私はあなたのために死んだんだから。あなたを本当に喜びの生命の世界に入れるために、私は十字架にかかったんだよ。さあ、頭を上げてごらん。私の胸の中に飛び込んできなさい」

と言って、抱きしめてくださる。きつとそうだと私は思います。私は本当に

「ああもつたいない、ありがとうございます！」  
と言うしかない。

然<sup>さ</sup>れど、かの時には顔を<sup>あわ</sup>対せて相見ん。今わが知るところ全からず、然<sup>さ</sup>れど、

かの時には我が知られたる如く全く知るべし。

かの時には私が知られているように、私も完璧にイエスキマのことを知ることになる。そういうことで、

<sup>13</sup>げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存<sup>のこ</sup>らん、而<sup>しか</sup>して其のうち最

も大<sup>おお</sup>なるは愛なり。」(コリント前13・1〜13)

「信仰と希望と愛」

という。これは昨日も申しましたように、信仰というのは過去の事実を現在化していくことです。たとえば十字架にかかったことは過去の事実ですね。その十字架で我々の罪が贖われた。罪と死から救われたという事態が現在も生き生きと生きている。つまり、過去の事実を現在化して、その中に我々は生かされる。

希望というのは、「将来こうなるよ」ということ。信仰もヘブル書の中に、

「それ信仰とは望むところを確信し、まだ見えないものを<sup>まこと</sup>真実とする」

と。つまり、まだ現実化してないけれども、「必ずそうなる」という事態を現在に引き寄せて、それを踏まえて自分たちの生活を築きあげていくことです。

信仰は十字架にかかってくださったことを現在化する、つまり過去を現在化する。希望というのは、将来のことを現在化する。それを

「既に得たり」

として、それを踏みしめ踏みしめて現在を充実させて生きていく。そして主キリストを讚美する。そういう姿ですね。

まとめますと、過去を現在化する信仰の中に我々は生かされる。また希望という将来に起こる素晴らしい事柄を現在化して、現在を充実して生きる。愛というのは、常に真上か



ら太陽が照らしているように、キリストの愛は常に真上から自分たちに迫ってくる。そして、生命を与えてくれる。そういうことで、

「過去を現在化する信仰、また将来を現在化する希望、そして現在、太陽の如く真上から照らして我々を命付けてくれるこの愛。この三つは、これこそが永遠に残るものである。その中で何といっても最大なものは愛なり」と。この「最大なものは愛なり」という「愛」はキリストご自身というふうを受けとつたら、一層ハッキリしますね。

●日本人の魂の伝道は日本人が引き受ける

結論として私が申したいことは何かというと、我々の側から必要なことは何も出てこないということ。キリストがすべて必要なことはしてくださった。我々を本当に神の子とするために必要なことは全部、キリストがやってくださった。そして、キリストはそれをご自身の手柄とはしないで、父の前にも平伏しの姿でいてくださった。

キリストの十字架の贖いの愛、これなくしては我々は救われっこありません。キリストの十字架が立っている以上、

「あなたは罪びとである。あなたはまだまだこういうところが足らんよ」とか、人が何と言おうが、そんなことは勝手にしろということになる。

「キリストはご自身の義を私たちに無条件にくださった。その無条件にくださったキリストのご愛に、私は無条件に従っていく。自分を投げ出し、キリストの弟子として、何者をも恐れぬ。自分の生涯は、キリストから賜った新しい生命、これを感謝し讚美し、そしてそのキリストの生命を世の人々に分かち与えていく。これが自分のこれからの使命である」

ということ。ただ申したいのは、

「それが使命だからといって、この世の職業を棄てて伝道者になる」

というのではない。昔、私がある教団に属していました時に——フィンランドあるいはスウェーデンといった外国の教団ですけれども——そこで熱心な信者が出てくると教団側はすぐ引っこ抜くんですよ。

「あなたは召命により、現在の職業を棄てて伝道者の道を歩みなさい」

と。熱心な信者が現れると、みな引っこ抜いていくんです。そんなことをしたら、残るのは熱心でない者ばかりということになるでしょ。僕はそれはおかしいと思った。熱心な信者が現れたら、その熱心さでこの現代の世の中を清めていってほしいと思う。

「会社員なら会社員、公務員なら公務員、職業はそれぞれ天賦天職で与えられていく。その中でキリストの生命、キリストの愛、キリストの光をもって、世の中を清めていく、導いていく、それがあなたの新しい役割だよ」



と言われたら、私も、

「はい、ありがとうございます、その通りです」

と言いたいたんだけれども、そうじゃなくて、全部引っこ抜いて伝道者にしていく。私はそれはとんでもないことだと思つて、そういう教団とは縁を切りました。

ちやうどそういう方々と縁を切った頃に小池辰雄先生と知り合つた。そして、先生の生き方こそが本当の生き方だと思つた。しかも、その福音というのは本当に無限無量の広さと深さを持つている。本当に感動しました。それは1959年の秋に先生を京都にお迎えして、講演会をやつていただいた時の福音です。ちやうどドイツ文学会が京都大学であった時のことです。それがきっかけで先生との繋がりができました。

更に、余計なことを申しますと、その頃は市川君を初め私たちはフィンランドの宣教師の指導下にあつた。我々は小池先生に出会つて嬉しいものだから、市川君は自分を育ててくれたフィンランドの宣教師にそのことを嬉々として伝えた。そうしたら、返事は、

「何者にたぶらかされたか!？」

という返事ですよ。

「そんな無教会なんて、神に反逆するような、教会を無視するようなご連中とあなたの手を結ぶなら、我々と絶縁するか、どちらかを選べ！」

と。市川君は語学もできますので、必死になつて自分たちの正当性を言つただけけれども、相手は全然聞く耳を持たない。やむなくそこで決裂した。それで市川君はそこから独立伝道の道を歩んだ。そういうことが過去の歴史的な出来事としてあつた。私にとつてはまだ初期の頃です。信仰に導かれた当初です。そういうことを踏まえて、私は小池先生との交わりが、霊的、信仰的な面でも深まれば深まるほど、

「これは素晴らしい。やはり日本人の魂の伝道は日本人が引き受けないとダメだ」

ということを固く信ずるようになりました。そういうことが、遡れば、1959年、1960年という、今から60年前にありました。

そういうことを踏まえて、私はこの世ではしんどい職業に携わつてきたけれども、それとともに、いわば二足の草鞋わらじを履くように福音の道を歩んできたわけです。その結果として、皆さんがこうやつて、ここに居てくださるんです。本当に有り難いことです。だから、私はもうそういうことを思えば、ただただ感謝、有り難うという気持ちです。そして、

「サポートしてくれた方々、ありがとうございます。そして、私がやがて天に召されたあと、

皆さん、よろしく頼みますよ！」

と。そして、それを

「はい、まかしときー！」

と、さつきここで森君が言つてくれた。ありがとうございます。

そういうわけで、我々は理念、観念で生きていない。本当にキリストの生命が我々を満たし、



力づけ、励ましている。

「責任は私がつ。私に信頼して、まっしぐらに行け！」

と、こう言つて、進軍ラッパを鳴らしてくださったっているのがキリストではないだろうか。

「この輩ともがら黙せば、石叫ぶべし」

とキリストは仰つたですよ。

### ●無者を選び給えり

私たちはみな雑草のような存在かもしれない。けれども、そういう者を通して神は栄光を表してくださる。これはコリント前書の初めに出ています。1章18節から読んでいきます。

「<sup>18</sup>それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救わるる我らには神の能力なり。

<sup>19</sup>録して、『われ智者の智慧をほろぼし、慧き者のさときを空しうせん』とあ

ればなり。<sup>20</sup>智者いづくにか在る、学者いづくにか在る、この世の論者いづく

にか在る、神は世の智慧をして愚ならしめ給えるにあらずや。<sup>21</sup>世は己の

智慧をもて神を知らず（これ神の智慧に適えるなり）この故に神は宣教の愚

をもて、信ずる者を救うを善しとし給えり。

これは別な読み方をしたら、

「愚かな宣教をもつて、それをあえて信ずる者を救う。これが神の御意だ」

と。つまり、エリート、賢い者、そんなものを神さまは相手になさっていない。本当に無

条件に信じて従ってくる者、そういう者を神は喜び給うんだということがここで言われて

いると思う。私も、そういう意味では、正にここにいる「信ずる者」だったわけだ。

職業としては法律家として、それなりのことをやってきました。けれども、福音の世界

ではぶの素人ですから、知らなかつたんです。小池先生に触れて初めて、

「ああ、福音というのは素晴らしいものだなあ」

ということに目覚めた人間ですから、正にここに言いますように、

<sup>26</sup>兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる智き者おおからず、能力ある

者おおからず、貴きもの多からず。<sup>27</sup>されど神は智き者を辱しめんとて世の

愚なる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、<sup>28</sup>有る者を亡さんと

て世の卑しきもの、軽んぜらるる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。

ここを小池先生は、「無きが如き者」ではなくて、本当に「無者」、

「無者を選び給えり」

と読みたいと言われた。

<sup>29</sup>これ神の前に人の誇る事ならん為なり。<sup>30</sup>汝らは神に頼りてキリスト・イ

エスに在り、

「神に頼りて」と、神さまの御力によつてキリスト・イエスの中に抱き取られてあるんだよ。



そして、キリスト・イエスは神さまに立てられて、

彼は神に立てられて我らの智慧と義と聖と救贖あがないとなり給えり。」(コリント前

1・18〜30)

我々自身は義でも聖でも何でもない。けれども、キリストご自身が神さまから召しを受けられて、私たちの代わりに神の前に、義また聖、贖いとなってくださった。

そういうことで、以下の2章も素晴らしいところです。

「私たちが受けとるのはこの世の霊ではない。神さまから出てきた霊を受けとるんだ」

ということが書かれています。それから、

「生まれたままなる人間は神さまのことを認めるわけにいかない」

と。やっぱり、

「人あら新たに生まれずば、神の国に入ることができない。神の国を見ることがで

きない」

と、ヨハネ伝でキリストは言っておられる。つまり、

「いわゆる人間的な理性的なものだけでは神さまの本当のことはわからない」

ということをここで言っている。

「霊に属する者はすべてのことを弁わえる。人はその人の本質を知ることがで

きない」

と。そういった、我々人間が如何なる者かということはこのコリント前書は言ってくれています。その他、素晴らしい所がいろいろありますが、それは本日の主題ではありません。ただ飛ばすには勿体ないので、6章の終わりの所にふれてみたいと思います。

「17主につく者は之と一つ霊となるなり。」

淫行という、遊女たちと一つになることは、彼の魂と一体になってしまいうから、結局、神さまに逆らうことになる。そういうことを言っているんだらうと思います。

19 汝らの身は、その内にある神より受けたる聖霊の宮にして、汝らは己の者

にあらざるを知らぬか。」(コリント前6・17〜19)

と。汝らは聖霊の宮である。もうあなた方は自分のものではない。十字架で旧きあなたは死んでいるんだと。

「新しく賜ったあなたというのは、神の宮として、そこに聖霊を宿して生きていく。

そして、神・キリストを讃え、そして人々に神・キリストの恵みを伝えていく。

そういった使命を帯びた、尊い存在として新しく生み出されたんだ」

ということをここで言ってくれていると思います。



## ●無者キリスト道

このコリント前書にはいろいろ素晴らしい所がある。これも第3回集会の主題からはなれるけれども、9章の後半を見たら、

「いろんな人に本当に福音を知ってもらいたい。そのために自分はどんな事でもやる。それがもし人々をキリストに導くなら、<sup>は</sup>這いつくばってでもやりたい」といったことを告白している。

「<sup>すべ</sup>われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。<sup>20</sup>我ユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んが為なり。」（コリント前9・19、20）

以下に書いてありますことは、非キリスト教社会に生きる我々人間にとつて非常に大事なことです。自分はキリストの僕、クリスチャンだ。だから、この世のいわゆる宗教的行事——京都では、いつも夏になりますとお盆の行事がいろいろある。お地藏さんを中心にして子どもたち初め人々が集まってくる。最後の日にはお坊さんがお話なさる〔地藏盆〕——そういうところに、

「あ、私はクリスチャンだから、一切関与しません」

というのではなくて、そこへ私は一緒に行くんです。そして、お坊さんがいろいろ言っておられると、

「ああ、そうですね、そうですね。ただ、私はやっぱりキリストによつて、あなたが説かれて喜ぶの世界を頂いている。それで、あなた方のこともよくわかりますよ」

と言つて、自分たちがそこへ溶け込んでいく。排除するのではなくて、溶け込んでいって、いつしかその人たちを引っくり返してしまふ。これではなければ福音は日本に根付かないですよ。

「日本的なもの、日本的な宗教的伝統は全部ダメだ」

と言つて、多分、欧米の宣教師だったら、そういう態度をとるかもしれない。けれども、我々はそうは思わない。神道にせよ何にせよ、日本に根付いてきた宗教的伝統には尊いものがある。そういうものを肯定しながら、それを超えた本当の福音を証言するのが私たちの役目です。それを証言するには、今までのものを全部排斥して、

「ダメ、ダメ、ダメー！」

と言つたら、それでは全然繋がるポイントがつかめない。だから、「郷<sup>ごう</sup>に入れば郷<sup>ごう</sup>に従え」というように、みなそういう中に入って行って、内なるキリストの霊、愛をもつてその人たちを引っくり返していく。そういう祈りをもつて参加していく。そういうポジティブ（積極的）な行き方。それがクリスチャンが日本社会の中で本当に根をおろして、キリストの福音を生成発展させるために必要なことだと思ふ。



ところが、どうも、アメリカ、北欧、あるいはヨーロッパ、そういった所から来る宣教師たちは日本の宗教的伝統に対する理解が乏しい。無理ですよ、それを理解するのは。そうしたら、排除の論理はあっても、受け入れた上でそれを変質変貌させていくというところが乏しいですね。これは私の感想です。

ということは、小池先生が始め、先生が開いてくださったこの「無者キリスト道」、このキリスト道というものを私たちは生成発展させていくという責任を担っている。学者だからできるのか、そういうことではない。

「この輩ともがら黙さば石叫ぶべし」

「二人、三人、わが名によりて集うところに我もあるなり」

「小さき群れよ、恐れるな。御国を賜うことは汝の父の御意なり」

と。キリストはいと小さき者を本当に愛してくださった。そして、そういうものにご自分の智慧と力と生命を与えてくださった。

我々は、「いと小さき者」にすぎません。しかし、我々は日本的な伝統の中に育ちながら、しかし、そこに新しいキリストの生命をいただいた。それを日本社会に根付かしていく。そこに新しいものを創りだす。そういうパイオニア（開拓者、先駆者）としての役割を皆さんお一人お一人が担っていらつしやる。私はそういう思いで今日まで来ました。

まあ、私はもういつまでもこの地上に居るわけではありませんけれども、しかしながら、その思い、志、これを小池、奥田、更に第三世代としての皆さんが発展させていただきたい。そのように思っております。

### ●光の国へ行く靈魂と闇の方に行く靈魂

ついでながら、これもいつも引用する所ですけど、コリント前書10章13節を見てみたいと思います。

「<sup>13</sup>汝らが遭あいし試煉こころみは人の常つねならぬはなし。神は真実まことなれば、汝らを耐え忍ぶこと能あたわぬほどの試煉あに遭あわせず。汝らが試煉を耐え忍ぶことを得んために之と共に遁のがるべき道を備え給わん。」(コリント前10・13)

クリスチャンだからといって、試練に合わない、不幸な目に合わない、なんてことは在り得ない。クリスチャンだつて、この世の人たちと同じような試練にみまわれます。たとえば、津波ということを考えたら、クリスチャンだからといって津波をまぬがれさせて地上に残すなんてことはしません。それこそ、罪びとも義人も全部一緒に地上から取り去ってしまいます。けれども、キリストは言われた、

「肉体を滅ぼしても、それ以上何もできないものたちを恐れるな。肉体を滅ぼ

したのち、ゲヘナの火に投げこむ権威ある方を恐れよ」(ルカ12・4・5)

と、ルカ伝12章で言っておられます。



「私たちはクリスチャンで、神・キリストに守られている。だから、肉体は絶対安  
全である」

とは、私は思わない。そういう意味で特別扱いはされない。しかしながら、肉体の上に何  
があるかと、それで消え去るような存在ではない。この肉体と共にいただいた霊、神・キ  
リストの霊は肉体が減り去っても、実に光輝いて人々を救いあげる。そういうふうには  
思っています。

霊という存在は見えないですね。昨日も言ったかと思いますが。人間には、肉体——からだ体で  
すね——と霊が備わっており、この霊は見えない。この霊が健全になると、肉体もどうや  
ら健全になりそう。肉体が病みますと、霊までシヨボンとする。そういう相関関係があ  
りそう。この霊と肉体とを繋ぐ役割をしているのが「心」というもの。心はどこにあるの？  
心臓？ 心臓は心ではありませんね、ハートと言いますけれども。何かそういう霊とい  
見えないものがある。神さまと繋がるのは霊でしょ。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝せよ」

と言われた。その霊の次元。それから肉体というこの現象界の我々の姿。そういう二つを  
媒介しているのが、何か「心」という存在のような気がする。申し上げたいことは、

「この体からだの方はたとえ津波で滅ぼされても、どっこい、霊は滅びませんよ。霊はま  
すます輝きを増して生きますよ」

と。私はそう思う。ですから、一切を主さまに任せて、何かあるかと、

「あなたは生命をかけて私たちを救い出してください。罪と死から贖い出し、救  
いだし、そして、あのご復活の姿をもって、あの栄光の姿をもって、『あなたたち  
もそうなるんだよ』ということ、私たちの姿をあらかじめ現してください」

と。だから、ピリピ書なんかでは、

「喜べ、喜べ」

と言ってくれてますね。そういうことを私たちは理屈で思うのではない。事実そうなんだと。  
私たちには目に見える現実として肉体の面しか見えない。外なる人は破れていきます。そ  
ういうものしか見えない。けれども、見えないその奥にある霊的現実はますます輝いて、  
そして肉体が終わりを告げた時に、それは燦然さんぜんと輝いて、神・キリストのところへと導か  
れていく。

神・キリストの霊の次元の世界は、光から闇までいくらもあると思う。そして、それぞ  
れの魂はそれに相応ふさわしい所へ行くそうです。暗闇に相応しい魂が光の中へ行ったら、苦し  
くてしょうがないらしい。それはヨハネ伝3章に書いてます。人はその行いが悪いから、  
光よりも闇を好んだという。3章16節から、

「16 それ神はその独子ひとりごを賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡  
びずして、永遠の生命を得んためなり。17 神その子を世よこに遣したまえるは、



世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18 彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり。

19 その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。20 すべて悪を行う者は光をにくみて光に來らず、

これはやはり、光に照らされるとまずいんですね。だから、

その行為の責められざらん為なり。21 真をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顕れん為なり。」(ヨハネ3・16、21)

私はむしろ、

「真を行う者は光にくる。神によって導かれて、そこでそういった光の行為が実現していった、神・キリストの御業である」

と、そう私は思っています。こういうところにハッキリと、人の肉体は、義人であろうとそうでない人であろうと、みな同じように死に、津波にさらわれ、そして体が見つかれば焼かれて土に還る、そういう同じ運命をたどることが示されています。霊魂というのは、それぞれの霊魂の次元に応じて、光の国へ行く霊魂もあれば、闇の方に行く霊魂もある。私はそう信じています。

「神は光にして、少しも暗きところがない」

と、ヤコブ書なんかにも書いてあります。だから、人間は、死んでお終いではない。死んだのちに——死というのは肉体の滅びです——霊というものはそこで露なる姿で現れてくる。今まで隠された、肉体の中に埋没していた霊が、今度は露な姿で現れて、その霊に相應しいところにそれぞれ導かれる。我々、キリストに従ってきた人間はみな、キリストのいらつしやる光の世界へと導かれていく。それに反逆していた者は闇の世界へと当然、闇の方からお誘いがくる。

京都大学におります時に、4月になると、吉田神社へ続く東一条から正門の入り口まで——150メートル位あるでしょうかね——そこにずらっと立て看板が並ぶ。

「ボート部にきたれ、何々部にきたれ」

とかいうのが並んで、新人獲得合戦が行われる。その中で屈強な人間をつかまえようと思つて、アメリカンフットボールのごつつい連中がきたり、これという学生を捕まえて説得しようとする。そういう新人獲得合戦があるんですよ。あの光景を見てたら、私は、人間が死んだら、そうやって霊界に入った時に、それぞれの霊の弟子たちが、

「俺のところへ来い、俺のところへ来い。お前は光へ。お前は闇へ。それがふさわしい」

と引つ張り込む。そういった新人獲得合戦がそれぞれの霊界で行われると思う。我々は、

「私たちは、あのキリストさまがいらつしやる、あそこが私の故里なんですよ。わが国籍は天にありと、これが今、成就するんです。ああ嬉しいですね。あなたは



キリストのお弟子さん？ ああ、そういうお弟子さんに私は出会えて嬉しい。これから一緒にやりましょう」

なんて言って天国で握手したりする。

「あつ、先に召されて行った京都召団の誰々君がここで輝いていないですか、よかったねえ！」

とか。そういったことが、私にとつてはリアリティ(現実)なんですよ。そうでしょ。もう地上の命はあと僅かですからね、私は。でも、それが終わってゼロじゃない。それが終わった時に、肉体は土に還るけれども、霊というものは輝きを放って、そして相應しいところへ行く。主さまの前に出たら、もう平伏すしかないのでしょね。それから、先に天に召された妻とか孫たちに逢ったら、

「ああ、よかったねえ！」

「ああ、おじいちゃん、うれしい！」

と向こうが言ってくれたら。それが私にとつてはもうリアリティなんです。近いですから、向こうがね。

### ●福音の道は喜びの道

ですから、皆さん——同じことの繰り返しになって申し訳ないけれども——我々が導かれていた世界は、見える世界ではない。しかし、見える世界ではないからゼロかというところ、見えないけれども本ものということ。

「見えるものは一時的だ。見えないものは永遠に続く」

と、コリント第二の手紙の4章にありますね。

「<sup>18</sup>我らの顧みる所は見ゆるものにあらずで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」(コリント後4・18)

「我々の見るところは、見えるところにあらず、見えぬものなのである。見えるものは一時的にして、見えないものこそが永遠である」(コリント二4・18)

と書いてありますね。ああいうところを、皆さん、本当にリアリティ(現実)として受けとって、そしていよいよ御名を讃えていくことが大事です。御名を讃えていたら、輝きますよ。そしたら、周りの人から見たら、

「あの人、年をとればとるほど輝いているね、不思議やなあ？」

ということになるかも知れない。それが証(あかし)でしょうね。証というのは、その存在そのものが光を放っている姿です。その理由を問われたら、

「わかりません。でも、私はとにかく若い時からキリストさまオンリーで来たんです。そして、職業がなくなったら、ますますキリストさまオンリーになってしまった。もう向こうが近いから、だんだん嬉しくなってきたんですよ。向こうへ行



「だったら、先に召された妻や孫たちに会えるしね。だから、本当に私は嬉しいんですよ」

と。これが正直な気持ちですね。

「あつ、そうか。そういうものなんですか!」

と、もし周りの人が感動してくれたら、これはしめたものですね。

「あつ、そうか。あんた変わった人やね、サヨナラ!」

と(笑)。どういう反応がくるかわかりません。けれども、我々はキリストがくださった道を素直に歩んでいけば、あとなさるのは主ご自身ですから。お任せなんです、それでいいですよ。まあまあ、そんなことで、皆さんも、福音の道はしんどいんじゃないことを知ってほしい。喜びの道なんです。キリストが、

「喜べ、喜べ!」

と言ってくださっているんですね。だから、そういう喜びの姿を、どうぞ、皆さんのご生涯を通して証<sup>あかし</sup>してほしい。

「あの人はいつも嬉しそうに顔しているけれども、なんぞええことがあったんやろか? あんた、隠しているのどちがう? 宝くじが当たったのどちがう?」

なんて言ってるね。そして答えるのに、

「実は、私はキリストさまに救われて、だんだんキリストさまが身近になってきて、時にはキリストさまを夢で見たりして、そうすると何だか内側から活力が湧いてきて、嬉しいんですよ。現実には杖ついて歩いていてはいるけれども、

「外なる人は破るれども内なる人は日毎に新たなり」

と聖書に書いてあるんです。その通りなのが私の身の上に今、起こっているんですよ、ええ」

なんて言ってるね、これナチュラル(自然)でしょ。私たちは、何か取って付けたような行き方ではなくて、ごくナチュラルに生きて、ナチュラルに生きている行き方が実に神・キリストを讃美している。そういう在り方でありたいなと、そんなふうに思っています。

### ●我々が導かれている世界は生命に溢れる世界

まあいろいろしゃべりたいことが他にもたくさんあったんですけども。ヨハネ第一の書3章、4章で愛についても一度ふれます。ここもまた皆さん、どうぞ後で読んでみてください。その中で大事なことは、

「<sup>10</sup>愛というは、我ら神を愛せしにあらざ、神われらを愛し、その子を遣<sup>つかわ</sup>して

我らの罪のために宥<sup>なだめ</sup>の供物となし給いし是なり。」(ヨハネ一4・10)

ということ。それから有名なのは、

「<sup>8</sup>……神は愛なればなり」(ヨハネ一4・8)



というところですね。このヨハネ第一の書の3章を見てください。

「視よ、父の我らに賜いし愛の如何に大なるかを。我ら神の子と称えらる。既に神の子たり、世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。<sup>2</sup>愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ踰れず、主の現れたもう時われら之に肖んことを知る。」

そうなんです。主のお姿を見たら、我々は主の栄光のお姿に化せられるという。

我らその真の状を見るべければなり。<sup>3</sup>凡て主による此の希望を懐く者は、その清きがごとく己を潔くす。……<sup>20</sup>神は我らの心よりも大にして一切のことを知り給えばなり。<sup>21</sup>愛する者よ、我らが心みずから責むる所なくば、神に向いて懼なし。<sup>22</sup>且すべて求むる所を神より受くべし。是神の誠命を守りて御心にかなう所を行えばなり。……<sup>24</sup>神の誠命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給う。我らその賜うところの御霊に由りて其の我らに居給うことを知るなり。」(ヨハネ一3・1〜24)

と。それから4章7節をみると、

「愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生れ神を知るなり。<sup>8</sup>愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。」

「神は愛なり」という言葉はこういうところに出ているんです。

<sup>9</sup>神の愛われらに踰れたり。神はその生み給える独子(キリスト)を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。<sup>10</sup>愛というは、我ら神を愛せしにあらざ、神われらを愛し、

この御言葉は大事です。我々が神を愛したのではない。神さまの側でご自身を現して、我々を愛してくださった。その愛に打たれて、我々も人を愛し、神を愛する、そういうふうに創り変えられていったということです。

その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給いし是なり。十字架にかけてくださった。

<sup>11</sup>愛する者よ、斯くのごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし。」(ヨハネ一4・7〜11)

クリスチャンがお互いにいがみ合っていたら、これはもうダメですね。それから終わりのところ、5章3節、

「神の誠命を守るは即ち神を愛するなり、而してその誠命は難からず。<sup>4</sup>おおよそ神より生るる者は世に勝つ、世に勝つ勝利は我らの信仰なり。」

信仰とは無条件にキリストをいたたくことをいいますから。

<sup>5</sup>世に勝つものは誰ぞ、イエスを神の子と信する者にあらざや。

それから終わりのところへ行きます。11節、



11その証<sup>あかし</sup>はこれなり、神は永遠<sup>とこしえ</sup>の生命<sup>いのち</sup>を我らに賜えり、この生命はその子にあり。12御子<sup>みこ</sup>をもつ者は生命をもち、神の子をもたぬ者は生命をもたず。13われ神の子の名を信ずる汝らに此等のことを書き贈るは、汝らに自ら永遠の生命<sup>も</sup>を有つことを知らしめん為なり。

あなた方は自ら永遠の生命を既に持っている。そのことを知ってほしい。もう既に持っているんだよ。気付かないなら、気付いてほしいと。そういうことを言っている。

14我らが神に向いて確信する所は是なり、即ちこれがまた凄いんですね。

「求めよ、さらば与えられん」

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり。しっかりと繋がっていたら、何でも願いに従って求めよ」

と、ヨハネ伝15章で言っておられます。それと同じようなことがここに書いてある。

御意<sup>みこころ</sup>にかなう事を求めば、必ず聴き給う。

と。また「必ず聴き給う」というふう<sup>みこころ</sup>に知った以上は、もう求めた時、願った時に、

「はいっ、既に叶<sup>かな</sup>えられました」

と。あるいは、

「祈りたることは既に得たりとせよ」

とキリストは言われた。それと同じことがここに書かれているわけです。

15かく求むるところ、何事<sup>なにごと</sup>にても聴き給うと知れば、求めし願を得たる事をも知るなり。

と。そして、最後の方には、

18凡<sup>すべ</sup>て神より生れたる者の罪を犯さぬことを我らは知る。神より生れ給いし者、これを守りたもう故に、悪<sup>あく</sup>しきもの触<sup>ふ</sup>るる事をせざるなり。」(ヨハネ

一5・3〜18)

「神から生まれた者は決して罪を犯すことがない。キリストが守っていらつしやるからだ」

ということを、ここで言っています。これも有り難いですね、

「神より生まれたまいしキリスト、霊なるキリストが信徒を守って、悪霊たち、悪しき者が触れることを許さない。そうして守ってくれるから大丈夫だ」

と。本当に我々が導かれている世界というのは、非常にポジティブ(積極的)な生命に溢れる世界です。そして、やがて向こうへ行った時に、共に御名を讃える。既に召されていった人たちと会い、そして讚美を共にする。主さまの前に出ることをゆるされたら、

「主さま、ありがとうございます!」

と平伏すしかないでしょうね。



「よくやったよー!」

と言つてもらえたら、もつと嬉しいね、ええ。

どうぞ、そのようにして、皆さんも、本当に主を喜びとして、生き生きと生きて、

「クリスチャンというのには明るくて素晴らしいな。いつたい、いくら献金したら、

そういう喜びの世界に入れるの?」

「いいえ、何もいらないますよ。この身このまま主さまに捧げたら、それを一番よ

ろこんでくださるんです」

と言つて、皆さんがキリストの証人<sup>あかしびと</sup>として生涯を貫いてくだされば本当に、私だけではない、主ご自身が喜んでくださる。先に召された者たちも天界で喜んでくれる。そんなふうに思っています。それでは、これをもって私のお話を終わりいたします。どうも、ありがとうございました。

## ● 祈り

では最後に一言、お祈りいたします。

主さま、夏季福音特別集会をあなたが三日間にわたつて本当に導いてくださいました。取るに足らない者をあなたは召しだし、お用いくださいつて、こうして稀有<sup>けう</sup>なる福音をあなたが命懸けで私たちに伝えてくださった福音、キリスト道、これを共に告白し、讚美し、感謝することができました。あなたは本当に皆さんを、私を含めて一つとしてくださいました。

「これ彼らが一つとならんためなり」

と、あのヨハネ伝17章の大祭司の祈りで祈っていますことが、本当にここに現実成就しています。いよいよ、主さま、そのようにして、この小さき群れ、このキリスト召団をあなたが哀惜してくださいまして、あなたを証<sup>あかし</sup>する器として、どうぞ、それぞれの所で導き、御名を讚えしめてください。そして、許されるならば、来年の夏にまたここでお会いすることができれば、本当に嬉しくござります。

しかし、一切はあなたの御意次第<sup>みこころ</sup>。この身このまま、そのまま主さまにお委ねいたします。どうぞ、来年がどうなろうと、常にあなたの愛、生命、あなたのくださる信望愛、これは決してゆらぐことはありません。

どうぞ、ここに集われた兄弟姉妹たちが喜び勇んで、また新しき年に向かって感謝の一步を新たに踏み出して行かれますように、希<sup>こいねが</sup>いたてまつります。それぞれの所でそれぞれ集会を持つて、そこに新しい魂が導かれますように、どうぞ、おん助けください。事情があつて、この集会に参加できなかった方々にも、どうぞ、あなたのおん恵みを希い奉ります。三日間にわたるこの特別集会、本当にありがとうございます。尊い主キリストの御名によつて、この感謝、讚美を皆さまの祈りと共に御前にお捧げいたします。アーメン。

